

上野千鶴子、江原由美子編（有斐閣、2024年）

挑戦するフェミニズム ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて

青山 薫*

新自由主義とグローバル化による困難な時代に「フェミニズムは生き残れるか」という、江原由美子の問い（江原2022）から本書は始まる。そして、フェミニストや女性だけでなく、人類が、生き残るために必要なフェミニズムの展開をめざす。江原の問いは、ナンシー・フレイザーの「フェミニズムは資本主義の侍女となってしまった」——グローバル化に伴う格差の拡大も、女性の貧困化さえも見逃し、一部のエリート女性だけが資源や選択肢や能力を獲得する新自由主義に加担した（Fraiser 2013=2019）という批判に対する反問でもあり、本書は、これをわがこととして受け止めた上野ほか各論者からの応答である。

上野千鶴子（第1章）は、『家父長制と資本制』（岩波書店、1990年）刊行後30年間の変化を論じ、グローバル金融資本主義の中で、プロレタリアートは「階級的主体になりえない」（35-38頁）プレカリアートとなり、南北格差は移民と使用者の差として国内にも存在するようになり、ジェンダー間格差も、女性間・男性間格差も拡大したことを指摘する。

これを受けて足立真理子（第2章）は、金融危機以降の「フェミニズムの相貌をもつ新自由主義」（70頁）と「再生産領域の金融化」（92-94頁）の関連をひもとく。家計・世帯に金融取引のメカニズムが浸透し、学費も年金も、ひいては再生産そのものも、労働力のコストではなく「投資」となる。同時に、男性の「短期で無茶な決定を諫め」（96頁）、投資のリスクを抑えることができる新たな女性像が創られる。

そこで伊田久美子（第3章）が、資本主義批判としてのフェミニズムを再評価する。第二波フェミニズムは、「妻」「母」でない一人称の女性主体を登場させ、性と生殖と女性の身体の解放を主張し、「私的領域」を劣位に置く近代国民国家に異

議を申し立てた（113頁）。3点を結ぶ「個人」は多様で、先進国中心主義に異を唱え、第三波に続くフェミニズムのネットワークと連帯を開いた。

岡野八代（第4章）にとっては、リベラリズムの価値を手放さず、ポスト構造主義におけるアイデンティティの構築も有効とするのがフェミニズムである。それは、「個人の選択」を促すリベラルな資本主義の複雑な抑圧構造を理解可能にする。例えば、母親「業」を疎外・搾取といった労働概念に関係づけ、「ケアの倫理」（148頁）へとつなげる。フェミニズムは、「個人の選択フェティシズム」（152-153頁ほか）を脱し、分かち合いの倫理を築いたのである。

しかし日本では、強固な「男性稼ぎ主型」生活保障が機能不全を起こしている。それを大沢真理（第5章）が明らかにする。ひとり親家庭の貧困率が非常に高いことより衝撃的なのは、0～4歳と25～29歳の女性で、国による所得の再配分を経て余計に貧しくなる点である。大沢はこれを、女性が働くこと、産み育てることに制度が「罰を科している」（178頁）と言う。「罰」は、家父長制社会におけるミソジニーの具現化である（184頁）。

山根純佳（第6章）は、ケアをめぐる新自由主義的改革とフェミニズムの関係に焦点を当てる。フェミニズムがめざすケアの「脱家族化」は、現在、低賃金と「再生産労働の国際分業」によって成り立っている。ケア市場の拡大と公共機関の民営化が労働者の待遇を悪化させ、ギグワーカーと移民を増加させている。無償ケアのために賃労働を制限される女性と、ケアサービスを外注できる女性の格差を広げている。フェミニズムは当事者運動と連帯し、ディーセントな家事・ケア労働を計画すべきだ、と山根は主張する（210-211頁）。

女性と子どもの貧困をデータで裏付けてきた阿部彩（第7章）は、配偶者「死別」女性と「未婚」

* 神戸大学国際文化学研究科教授

女性の貧困リスクに注目する。この30年余で「死別」女性の貧困リスクは高齢者で上昇し、かつて「看取り保証」(220頁ほか)とも呼ばれた「死別」への所得保証は弱まった。未婚女性の貧困率は就労世代で上がり、高齢者で下がったがいまだに4割ある。均等法に代表される労働市場改革は、ケア負担の少なさから男性同等に働けるはずだった未婚女性の利益にさえならなかったのである。

以上から、3号被保険者制度や遺族年金を批判して縮小・撤廃するのではなく、女性に対する防貧機能を認め、取り戻そうという阿部の結論(237頁)は発想の大転換と言える。

労働市場における格差と女性の関係については、金井郁(第8章)が検討する。1990年代以降、補助役だった女性労働者が能力発揮の主体とみなされるようになってきた。ここで、エリート女性だけのネオリベラリズムに抗するため、金井はアマルティア・センのケイパビリティ概念(Sen 1992=2018)を導入する。何かを実現するために、「個人の選択」ではなく、抑圧構造・権力関係を問題にするケイパビリティは、構造的変化のために集团的エイジェンシーを要請する。これによって女性は連帯し、格差を変革し得るのである。

佐藤文香と児玉谷レミ(第9章)は、女性兵士問題の新展開を見る。グローバル化と新自由主義の中の「新しい戦争」(264頁ほか)では、人道支援など戦闘以外の任務が増し、女性兵士の包摂が進行した。そこに、フェミニズムの知が取り込まれている。国家はさらに民間の軍事安全保障会社を使い、市場を通じて、軍隊のジェンダー化、人種化、階級化された権力構造を損なわない暴力も行使する。「新しい戦争」は交差的な格差を縮小させず、私たちはさらに批判的な知を模索するほかない(279-280頁)、と佐藤・児玉谷は結ぶ。

最終章では三浦まり(第10章)が、フェミニズムと新自由主義化の力学を改めて読み解く。まず、男女賃金格差が大きく女性管理職割合が低い日本で、新自由主義に加担した、とフェミニズムの罪を問うのは現実的でない。新自由主義によるジェンダー平等の道具的利用が、あたかも反女

性差別に見え、左派的な反新自由主義と右派的な「反・反差別」が共振することもある(298-299頁)。「個人の選択」によるトランスジェンダーの権利と女性の安全が対立させられ、反新自由主義と「女性を守る」名目のミソジニーに女性たちが取り込まれる例も、三浦は挙げている(300頁)。

このように、確かに困難な状況に向き合い真に迫る各章の、連帯の結節点はどこにあるのか。乱暴にまとめれば、新自由主義と対立するケア中心の社会を構想し、「男並み」の女性登用に引き込まれないこと、「母親罰」の撤廃とケアの権利をめざすこと、個人が生き延びるだけでなく、差別・抑圧の構造を変革するような集团的エイジェンシーをはぐくむこと、である。まさに人類が生き延びるために必要不可欠な結節点と思われる。

一方、本書に対する小さな不満を挙げるとすれば2点。やはり第二派フェミニズムが公のものにしたセクシュアリティの政治性について、フェミニズムをも揺るがすジェンダー二分法そのものに対する疑義について、ほとんど触れられていないことである。どちらも新自由主義とグローバル化に深く関わる。とはいえ、これらもふまえた挑戦と連帯を求めつつ、フェミニズムが今後も生き延び、必要とされる道を本書は照らしている。

参考文献

江原由美子, 2022, 『持続するフェミニズムのために——グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』有斐閣。

Fraser, Nancy. 2013. "How Feminism Became Capitalism's Handmaiden - and How to Reclaim It: A Movement That Started out as a Critique of Capitalist Exploitation Ended up Contributing Key Ideas to Its Latest Neoliberal Phase." *The Guardian website*, Oct. 14, 2013. (菊地夏野訳, 2019, 「フェミニズムはどうして資本主義の侍女となってしまったのか——そしてどのように再生できるか」『早稲田文学』2019年冬号, 筑摩書房.)

Sen, Amartya. 1992. *Inequality Reexamined*. Russell Sage Foundation. (池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳, 2018, 『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店.)